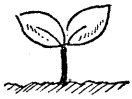
「送る」という気持

村石京子



今書いている原稿が活字になって載る頃には、クラスの子どもたちを送るその日が目の前に来ていることであろう。三月という月は、子どもたちにとっては、人生の中で初めての出立を迎える月である。「卒業」という嬉しくて晴れがましい体験、そしてその先には今までよりずっと一人前として社会から扱われる「小学生」という新しい門出が待っている。子どもたち自身どんなに誇らしく、その喜びも大きいことであろうか。

そして教師の側も子どもたちと同様に、いや、あの幼なかった入園当初の面影や、様々の出来事が忘れがたいだけに、今こうして見られる彼等の成長した姿がたとえようもなく嬉しい。しかし、嬉しいだけに、一方では手塩にかけた掌中の珠を手放すことに言いしれぬ淋しさと愛惜の気持で一杯になってくる。

T「四月になったら小学生ね」

「あのね、もう制服が出来たのよ」

T「嬉しいでしょ」

「嬉しいよ」

T「一人で学校へ通えるかしら?」

「大丈夫だよ、もう今だってちゃんと一人で出来るもの」

「小学生になるのは嬉しいけど、ちょっぴりいやなのは先生とお別れだからいやなの」

「先生も小学校へ来てくれればいいのに」

「ねえ」

何気ない子どもたちとの会話の中で、私は胸をズンとつかれ、別れの寂しさがこみあげて来てしまうこの頃である。

何回卒業生を出してもこの「送る」気持のつらさは変らない。それなら教師にとっては送ることは、つらい寂しいことなのかというと決してそうではない。彼等の二年間、三年間の歩みを走馬燈のように思い出し、頼もしく立派になった様子に、教師としての喜びを存分に味わうのが、この「送る」日であろう。全く複雑な胸の内である。人生には、人との出会い、ふれあい、そして別れがくり返されている。そして人との別れの中で、喜びと寂しさが折り重なり、やはり喜びの比重の大きいものは、卒業がその最たるものといえよう。

子どもたちを手元から送り出す時期が近くなり、一人一人のアルバムはりなどをやりはじめると、その写真の一枚一枚に思い出もつきないだけに、何かと来し方行く末を思う折も多くなってくる。一方ではその成長をもっと見守りたい気持がおきてくる。また一方では、今までの子どもたちに対しての自分の接し方、かかわりあいがあれでよかったのだろうかと迷いが出て来る。その時その時では、自分として決してなおざりにしない一生懸命の気持で接したつもりであっても、もっと別の角度から見ていれば違った心づかいが出来たかもしれない、もっと別の言葉かけをすれば違った反応や異なった状況に展開したかもしれないと、様々の事柄を思い起こすにつれ、あれでよかったのだろうかと胸が痛くなってくる。あの時はそう思ったけれど、どこかに思いやりが足りなかったのではないだろうか、子どもの側に立って考えてあげただろうかと至らなさばかりが強

まって子どもたちに済まなく思われてくる。人間の基礎をつくっていく大切な幼児期であり、何でも信じ受け入れていく時期であり、そして人生ではじめて接する教師の影響力を思うとき、その責任の大きさを感じ、自分は一体子どもたちに何をしてあげただろうかとその非力さに自分を恥じ、子どもたちにわびたい気持になってくる。

今日の一日をふり返ってみても、あの時もっと私の方からあの子の中へしっかり入っていって、あの子の心をつかまえた方が良かったのではないだろうか、いややはり子どもたちの世界を大事にしておいて、子ども同士の中から学びとっていくようにした方がよかったのだなどと迷い、なやみはつきることがない。そして明日はまた新しい出来事があり、その中で迷い、なやみがおきるに違いない。それから更に新しい社会へ巣立っていったとき、どうやってこの子たちは様々の出来事に対処し、適応していくであろうか。一人一人の性格がよくわかっているだけに心配もつきない。「送る」という言葉を広辞苑でひいてみたら、「人の出立に、別れがたくてついて行くのが原義」とあった。私の子どもたちを送る心はまさにそうであろう。出来ることならずっとつき添って見守っていきたい、そんな気持を無理に区切るのが卒業の時の「送る」という行為なのだろうか。

今の私は、もうじき訪れる「送る」喜びの日を前にして、思い、惑い、惜しみ、愛しながら、クラスの子どもたちの中にある。残された日々の保育の中で、一人一人の子どもたちが暖かく充たされた心を持てるようにと願いながら。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）